

御父の娘・御子の母・聖靈の花嫁



祝 被昇天

京都教区の皆さん
京都教区は三月二十二日、「マリア・アリス・クルトゥス」という教書を発表され、マリアへの信心が何となく影の薄い存在になつてゐるところに注意を惹かれて、以前よりさうに心配され、以前と同じく、いや以前よりさうにマリア様に対する愛を表明するよう強く勧められておられます。

神の御母であるマリア様は諸聖人のうちでも特別な地位を占め、キリストの神祕体において独自な役目をもつておられます。が、それは特別に神

の恩恵にまたされた超自然の特権を授かっておられるからアマゾンは神の御子の母であるばかりでなく、私たち信者の母でもあります。エイブラム・キリストが十日架上から使徒聖ヨハネに向つて「これはあなたの母である」とおっしゃったのを憶えておられるでしょう。

カトリック教理のクラスでよくマリ勉強の御絵をさし上げます。アマゾンの御絵を見て、心を動かされ、それを大切にした人たちの多く

司教古屋義之

京都教区時報
カトリック

古屋司教認可
発行 京都教区広報室

うであります。また、彼の傑作「最後の審判」には、ロザリオによって二つの魂が助け合い、このロザリオによって先に昇天した者たちがもう一人を天国へ引きよせた場面があります。教皇様の呼びかけに応じて、マリア様に愛を示す最も良き方法であるこの二つの祈りを以前にも増して唱えたいものです。また、このお祈りを教皇様のため、教会のため、捧げて下さるよう皆さんにお願いいたします。

三、司祭とのよりよい協力体制の確立。

協議会に回答した。次はその抜粋である。

日本における宣教師はもう必要でない、と考える人ひとが多いと聞き、取りあえずそこにわたくしたちの所存をささか述べてみたいと存じます。

こうした者の背後に、宣教の目的として人間実現が放ならばに正義と平和の実現が強く打ち出されており、しがたがつて開発の進んだ日本には宣教はもう必要でない、とみなされているようです。さらに寛恕は教会外にもあるとの考えに立っているように思われます。

しかし、わたくしたちは、キリストによらなければ完全な人間解放も正義と平和の実現も不可能であり、さらによつて一番大切な永遠の生活、つまり神との

もっととも歐米諸国におきましては、日本同様、召出しが減少の傾向にあり、今までのような宣教師派遣を期待できないことを知っています。料の上よりもむしろ立派な宣教師の来日をわたくしたちは切に望んでゐるのであります。立派な宣教師とはまさに神職であり、人びとにキリストを告げるためのみ生涯を捧げた司祭です。この姿が日本から尊敬されるための最大の条件となっています。こうして司祭によつて生きられた信仰がわれわれに伝えられるのであります。

くは信仰のお恵みをいただきました。マリア様を愛する人は強力なマリア様のお取次を受けるのがわかるように思えます。

マリア様への愛を表わす方法にはたくさんあります、が、教皇様は今回特に「お告げの祈り」と「ロザリオの祈り」について本当に詳しく説明し、その実行をいたくてもおられます。皆さんには、ミレーニアの「晩鐘」という有名な絵

南壮連総会

古屋司教とともに
にローマ巡礼

五月開催した司教協議会總長上にも多くの邦人が見うけられます。しかし、これは必ずしも歎息するべき活動により外人宣教師を必要とするについて、司教団の正式見解を出してもらいたい」との提案があつた。これに対し司教団は宣教区に對し「司教委員会の名で音頭を打つことは、虫の音でも見える

南壯連總會

古屋司教と
ローマ巡礼

外人宣教師は必要

ミルズ神父も出席された。なお他の二人、マースダム神父は三年前亡んで、ムルドン神父はオーストラリアで療養中である。

この祝いはただマリスト会の祝いではなく、同時に、カテキシカル・セミナー、コングレガシオン・ド・ノートルダム会、カノッサ会、シヤルトル聖パウロ会、聖ウルスラ会のシスター達や、その他の多くの人々と共に古屋司教のためであり、神の王国建設のために働いている皆の祝いであった。

事実、開発の進んだ日本では、物質的に繁栄しましたが、私利私欲が横行し倫理は低下しました。多くの人が精神的な貧困を感じています。そして、人の間の幸福にとどまらず、いかに精神的な要望が大切であるかが今さらながら見直され、宗教を真剣に考える人が最近増えています。

また、日本には邦人による教会制度がすでに樹立されており、これ以上外人宣教師による必要としないと考える人もあるようです。実際、司教會は全員邦人であり、修道会の

はないでしょうか。
さらば、どのような専門的な知識を身につけるべくさかは、日本に来てから、どのようにも解決できる問題であります。
宣教師には、それぞれの国の良さと魅惑があり、日本教会は宣教師の存在によつて、カトリックをあらわし、内容的にも多彩にして豊かなものとなつてゐます。

